

## チェルノブイリから25年

旧ソ連時代、ウクライナのチェルノブイリで原発事故が発生してから今年で丁度25年を迎えました。

あの大事故が発生してから四半世紀が経ってしまったという感慨と同時に、今、福島第一原発事故に遭遇して、我々は一体過去から何を学んできたのだろうか、やりきれない思いで一杯です。

チェルノブイリという言葉は記憶していても、事故の凄まじさ、被害の大きさは、時の経過と共に記憶が薄れ、歴史の中の一コマとして遠くへ押しやられてしまっていたのではないかと思います。しかし、未だに多くの子どもたちがガンの恐怖と闘っていますし、事故を起こした原子炉を覆っているコンクリートが劣化し、新たな問題となっているなど、あの悲惨な出来事は決して過去のものとはなっておりません。

25年前、チェルノブイリで原発事故が発生したというニュースが飛び込んできたとき、正確な情報が伝わらないなど、旧ソ連政府の対応の拙さもあって、私は「日本ならそういう事故は起こさないだろうな」と、今となってみれば殆ど根拠のない認識を持っていたように思います。

チェルノブイリの事故に先立つこと7年前（1979年）にスリーマイル島原発事故が発生していることを考えますと、一体我が国は、この二度にわたる貴重な教訓をどのように活かしてきたのか疑問です。

過日、私の大学の先輩から一つの資料をいただきました。それは、チェルノブイリの事故発生当時、ドイツ連邦の青少年・家庭及び保健大臣が、国民から寄せられた様々な懸念や質問に対して発したメッセージで「チェルノブイリ原発事故に関する21項目の質問にお答えする」と題するものでした。

その中で、大臣は「私たちが銘記しなければならないことは“人間は平常同じ行為を繰り返していても、リスクに晒されることは免れない”ということです。政治的責任者としての私も、全てのリスクが除外できるかのように振舞うことはできません。」と述べています。

我々は、原子力発電は非常に危険な技術であることは承知していますが、政府や電力会社からの原発は安全であるという説明によって、危険であるけれどもその危険はコントロールできるものだと思っていたと思います。しかし、福島第一原発の事故に直面して、それが単に「神話」に過ぎなかったことを思い知らされました。

コントロールすべきなのはリスクであって、情報ではありません。政府や電力会社は、仮に不都合な情報であっても、正確な情報を適確に国民に提供すべきです。また、如何に順調に作動しているものであっても、そこに潜むリスクから目を背けてはなりません。

今回の事故に関して「想定外の災害」という言葉を耳にします。しかし、想定外だったのは、地震と津波の規模であり、電源が途絶し、原子炉の冷却機能がストップした場合に生ずる事態は想定範囲内であった筈です。責任の所在を明確にしないまま「想定外」という言葉を使用することは避けるべきです。（塾頭 吉田 洋一）